【連載】

# 『凛々たる人生』

## ― 志を貫いた先人の姿 ―

【第十三回】新聞の使命を貫徹した

## 桐生悠々（ゆうゆう）

東京大学名誉教授　月尾嘉男

### 「社会の木鐸（ぼくたく）」を追求した人生

金属の活字を使用する印刷技術は一三世紀の中国に登場し、日本には一四世紀に伝来していましたが、文字が多種多様であるため広範に使用されることはありませんでした。しかし、明治時代になると海外の先進諸国の技術が一気に流入するようになり、それを使用して印刷した新聞や雑誌が急速に登場しはじめ、一八七一（明治三）年には日本で最初の日刊新聞『横濱毎日新聞』が発刊されています（図1）。

最近はあまり使用されませんが、「社会の木鐸」という言葉があります。木鐸は古代の中国で社会に法令などを伝達するときに注意を喚起するために使用された木製の道具ですが、そこから新聞や放送など社会に事実を伝達する手段を表現する言葉になっています。





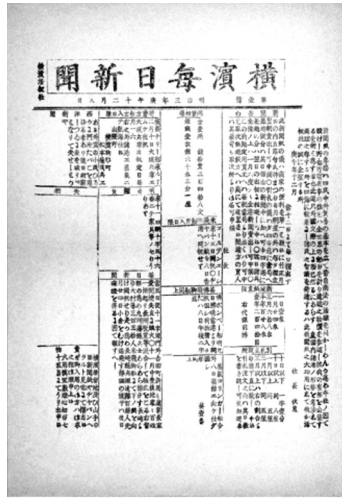
横濱毎日新聞

図1　横濱毎日新聞

しかし、政府や企業にとって報道されたくない情報を伝播（でんぱ）されるのは迷惑なことなので、その本来の使命を遂行するのには正義の意識と勇気が必要な場合もあります。

その側面を強調して、行政・立法・司法とともに新聞は「第四の権力」、新聞記者は「無冠の帝王」と表現されることがあります。その名称に相応（ふさわ）しい活動をした人々は国内にも国外にも多数存在しますが、その一人で、明治時代から戦前の昭和時代にかけて、政府や軍部からの様々な圧力に抵抗しながらも、自身の意見を新聞や雑誌で表明してきた桐生悠々（本名は政次）という硬骨の人物を今回は紹介します。

### 上京して様々な職業を経験

桐生は一八七三（明治六）年に石川県金沢市の貧乏な加賀藩士の家庭の三男として誕生

桐生悠々（1873-1941）

し、明治時代になって金沢に創設された第四高等中学校（金沢大学の前身）に入学しました（図2）。やはり加賀藩士の三男に誕生し、戦前を代表する作家として『足迹』『縮図』などの小説で有名になる徳田秋聲（しゅうせい）は同級で親友でした（図3）。一八九一（明治二四）年に徳田は父親が死亡したため、中途退学して翌年に作家を目指して上京します。

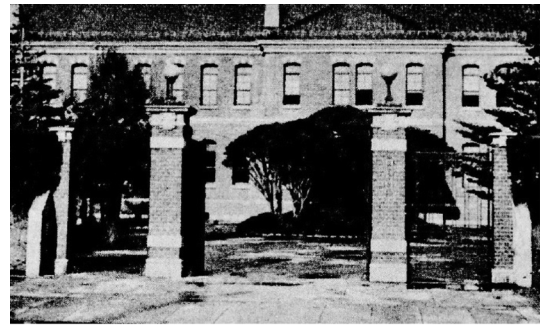
図2 第四高等中学校

桐生も同行して、作家として幸田露伴とともに有名になりつつあった尾崎紅葉の弟子にしてほしいと二人で訪問します。紅葉は不在であったため徳田は原稿を郵送し、そのまま東京に滞在して博文館編集部に勤務していましたが、しばらくして機会があって一八九五（明治二八）年から紅葉の弟子となり、日本の近代文学を代表する有名な作家になりました。しかし桐生は東京に残留せず、一旦、金沢に帰郷しました。

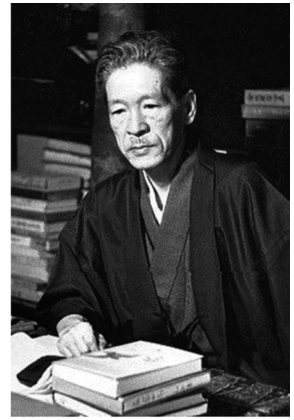
図3 徳田秋聲（1872-1943）

三年が経過した一八九五（明治二八）年に再度上京し、今度は帝国大学法科大学政治学科（現在の東京大学法学部政治学科）に入学



します。一八九九（明治三二）年に卒業してから東京府商工課に就職しますが、役人の市民への高慢な態度に立腹して退職し、以後、保険会社、出版会社、『下野新聞』、『大阪毎日新聞』、『大阪朝日新聞』などを転々とし、三七歳になった一九〇七（明治四〇）年に『東京朝日新聞』で仕事をするようになりました。

## 権威に抵抗して異論を表明

筆者が一般社会で生活するようになった五〇年以上前には乱暴な取材をする新聞記者に何度も出会ったことがありますが、桐生も乱暴な記者の典型で、『大阪朝日新聞』に勤務していた時代に、大正天皇に即位される以前の嘉仁（よしひと）親王が鹿児島県の桜島の対岸にある島津別邸「仙巌園」（図4）に行啓されたときには、借物のフロックコートを着用して随行の役人のような格好で正門から堂々と入園し、スクープ記事を執筆したこともありました。

『東京朝日新聞』でも気負った記事を執筆しますが採用されなかったため、上司の渋川玄耳の机上にあった硯箱を破壊してしまいました。立派な上司の渋川は桐生に自分の意見を自由に執筆するように指導したので、桐生は「べらんめえ」という匿名の時評で様々な社会問題についての見解を執筆したところ

図4 仙巌園から桜島を眺望

人気になりました。一九一〇（明治四三）年に『信濃毎日新聞』に移動して主筆になりますが、ここでも事件を発生させます。

警察から出頭命令が到着したのです。原因は左翼思想を表明していた幸徳秋水（図5）が明治天皇の暗殺計画に関与した一二名の一人として一九一一（明治四四）年に死刑になる大逆事件です。この裁判の報道は禁止されていましたが、桐生は『信濃毎日新聞』で批判していたため、警察が桐生に記事にしないよう命令する目的でした。しかし、この程度で委縮する桐生ではなく、個人の感想であれば問題ないだろうと新聞に執筆していました。

図5　幸徳秋水（1871-1911）

さらに『信濃毎日新聞』の東京支社に勤務していた時代には、夕方になると、以前、勤務していた東京朝日新聞社を訪問し、友人から最新の情報を仕入れ、その内容を電話で『信濃毎日新聞』に送信していました。そのため同紙は地方の新聞では他社に先駆けて明治天皇の崩御や乃木大将の殉死のニュースを掲載していました。掟破りですが、ある意味では辣腕の記者であったともいえます。

同様の問題は一九一八（大正七）年にも発生します。寺内正毅内閣が八月にシベリア出兵を宣言したためコメの買占めが発生し、コメが市場で不足するとともに米価が高騰する事態になりました。そこで寺内内閣はコメ騒動の報道を禁止しますが、桐生は言論の自由を擁護するため内閣の打倒を主張し、さらに





九月に東京で寺内内閣弾劾全国記者大会を開催した結果、寺内内閣は倒閣するという結果になりました。

しかし政治を混乱させるだけではないところに桐生の特徴があります。第四次伊藤博文内閣の逓信大臣の星享は一九〇〇（明治三三）年に東京市会の汚職事件の中心人物とされて辞任しますが、翌年、暗殺されました。世論は暗殺を当然とする空気で、桐生が在籍していた雑誌『太陽』も犯人を称賛する記事を掲載していました。しかし桐生は星の政治姿勢を評価していませんでしたが、自身の雑誌では追悼の文章を掲載しています。

## 名古屋市で再度の出発

しかし、桐生も自由に記事を執筆できたわけではありませんでした。一九一〇（明治四三）年から『信濃毎日新聞』の主筆に就任しており、一九一二（大正元）年の明治天皇の大喪の時刻に夫妻で自害した乃木希典陸軍大将を批判する社説「陋習打破論―乃木将軍の殉死」を発表しましたが、問題が発生しました。『信濃毎日新聞』社長の小坂順造は政友会所属の国会議員であったため意見が対立し、結局、桐生は退社することになりました。

そこで『新愛知』新聞（図6）の主筆として名古屋市に赴任し、社説や記事を執筆しますが、論調は以前と変化することなく、反権力かつ反政友会でした。しかし、名古屋市にはもう一

図6　『新愛知』新聞の題字

紙『名古屋新聞』という憲政会系の新聞があったため、熾烈（しれつ）な販売合戦になり、主張を明確にした記事で購読者数の増加を画策しました。皮肉なことに両紙は太平洋戦争中の新聞統合政策によって『中部日本新聞』（現在の『中日新聞』）となり、現在まで継続しています。

しかし『新愛知』新聞では主筆として文章を執筆するだけではなく、自身が設定した特定の課題について記事や社説を集中して掲載するプレス・キャンペーンを実施します。これには硬軟両方の事例がありますが、硬派では前述したコメ騒動に関連して寺内内閣を弾劾して倒閣になるまで追求した事件が一例ですが、軟派では「檜山事件」と名付けられる地元の女子学校の内部問題を徹底して追求した事件があります。

名古屋市に名古屋市立第一高等女学校という公立高等学校があり、そこの校長が授業のある白昼に、校内の教室で女性教員と密会していることが内部の女性教員から密告されるという事件が発生しました。当初は新聞も黙視していましたが、校長が事件を隠蔽するために密告した女性教員や支援する教員を辞任させようとしたため、『新愛知』は記事にした結果、最後は法廷闘争にまで発展してしまいました。

## さらなる波乱万丈の晩年

しかし、次第に報道するだけでは物足りないという気持ちになり、ついに桐生は一九二四（大正一三）年に国政選挙で名古屋市一区から出馬することになります。これまで紹介した事例からも推測できるように、何事も派手に実行する性格のため、当時では物珍しいオートバイを何台も動員して選挙運動をしましたが、途中で当選の見込みはないと判断し、





あっさりと選挙活動を中止するという淡白な側面もありました。

この落選によって浪人となりますが、一九二八（昭和三）年になって、再度、古巣『信濃毎日新聞』の主筆として復帰します。当時は一九二九年にアメリカで発生した恐慌が世界に波及し、日本でも昭和恐慌が発生した騒乱の時期でした。そのため一九三二（昭和七）年には軍部の青年将校が決起する五・一五事件、一九三六（昭和一一）年には二・二六事件が発生し、日本全体が混乱の社会に突入していく状況でした。

そのような時期の一九三三（昭和八）年八月に東京を中心にした関東一帯で関東地方防空大演習が実施されました。桐生は『信濃毎日新聞』の「社説」で「関東防空大演習を嗤（わら）う」という意見を発表します。意図は攻撃された段階で勝負は決定しており、演習は意味がないという正論でした。しかし陸軍が強硬に反撃したため、『信濃毎日新聞』の不買運動が発生した結果、桐生は翌月に退社することになります。

引退した桐生は愛知県守山町で「名古屋読書会」を主宰し、B・ラッセル、H・G・ウエルズ、P・ヴァレリーなどの原書を抄訳して会誌『他山の石』に掲載し、会員の勉強資料としていました。しかし、日米の開戦が切迫してきた一九四一（昭和一六）年にガンが悪化し、覚悟した桐生は『他山の石』廃刊を決意し、最終号には日本の敗戦を明確に予言した言葉を執筆しました。生涯、権力に抵抗した見事な人生でした。

つきおか　よしお
一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。
趣味はカヤックとクロスカントリースキー。
著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叡智』『転換日本』『清々しき人々』『凛々たる人生』『爽快なる人生』など多数。